

Kappa Novels



お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけます。ありがとうございました。存じます。なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三

(郵便番号112)

光文社 出版局

長編推理小説 ^ひ轢き逃げ家族

昭和49年12月15日 初版発行

昭和50年2月10日 13版発行

著 者 ささ ざわ さ 保
笹 沢 左 保

東京都小平市小川東町2028

発行者 小 保 方 宇 三 郎

印刷者 盛 照 雄

東京都文京区水道2-4-26

慶昌堂印刷

発行所 東京都文京区音羽2 株式会社 光 文 社
振替東京115347 電話 東京(942) 2241(代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。(覆本製本)
表紙の模様・意匠登録 116613 © Saho Sasazawa 1974

(分)0-2-93(製)02261(出)2271 (0)

Printed in Japan

ひ に か そく
轢き逃げ家族
「突如として 男が」改題

さき さわ さ ほ
笹沢左保



カッパ・ノベルス

目次

残酷な逆転	離婚の提案	突然の死	耳の記憶	崩壊	嵐 あらし の前	恐怖の謀議	雨の女
185	160	129	93	73	43	24	5

イラストレーション

小松久子

第一章 雨の女

1

なんとなく、不安であった。夫や姑しゅうとめに嘘をつくのは、
こんどが初めてではなかった。黒木昌彦くろぎ まさひこという男と、秘
密の時間を持つのは、この夏以降六度目のことなのであ
る。

過去の五回の密会には、なんの不安も感じなかった。
平然と家を出て、当たり前な顔で帰宅した。とくに、罪
を意識することもなかった。知られてはならないことだ
が、それは霧子きりこにとって生活の一部と変わりなかったの
であった。

だが、今回に限り、霧子は不安を覚えたのである。出
かける前から、迷いを感じたのだった。なぜ不安なのか、
その理由については、まったく思い当たることがなかつ
た。

理由などない、といってもいいだろう。漠然とした不
安であった。あるいは、悪い予感というもののなのかもしれ
ない。そう思うといっそう、不安と迷いが強まるので
ある。

その日は、高校時代の同窓会に顔を出すということに
なっていた。単なる口実ではなかった。十一月二十四日、
午後二時よりと明記された通知が来ているのである。

場所は、赤坂あかさかのホテルであった。そのようにタイプ印
刷された葉書を、夫も姑も見ているのだ。もちろんこれ
までと同様に、夫や姑は爪つめの先ほども疑ってはいないので
ある。

霧子も、同窓会にはちゃんと出席するつもりであった。
おそらく同窓会は、六時ごろに解散ということになる。
そのあとは有志だけの、二次会になるはずだった。

霧子は、二次会には参加しない。同窓会が終わったら、
黒木昌彦との待ち合わせの場所へ直行するのである。黒
木昌彦とは品川しながわのホテルのロビーで、七時に待ち合わせ
ることがすでに決まっている。

気にするようなことは、何一つとしてないのである。
これまでのように平然と家を出て、当たり前な顔で帰宅
すればいいはずであった。そう思いながらも、なぜか霧

子は釈然としなかったのだ。

一つには、家族との約束を破るということが、気がかりだったのかもしれない。十一月二十四日は、家族そろってドライブをすることになっていたのである。

夫の英也と霧子、四歳になる子どもの英樹、それに夫の弟の哲也と婚約者の近藤麻記とメンバーも決まっていた。箱根まで行く日帰りのドライブであった。

そのドライブの話がまとまったのは十一月の初旬だった。同窓会の通知が来たのは、それより五日ほど遅かったのである。本来ならば、ドライブのほうを優先しなければならなかった。

しかし、霧子は同窓会の通知を受けとった瞬間に、これを黒木昌彦との密会に利用すべきだと思ったのである。霧子はすぐに連絡をとり、黒木昌彦と落ち合う場所と時間を打ち合わせたのだった。

夫や子どもとのドライブをやめて、男との密会のほうに重点を置く。そのことで霧子は人妻として、心に咎めるものがあるのだった。それが迷いや逡巡に、形を変えているのに違いなかった。

「わたし、同窓会へ行くのをやめようかしら……」

十一月二十四日の朝になってから、霧子は夫の英也に

ふとそんなことを言ってみた。英也がやめろと言ったら、霧子はそうするつもりだったのである。だが、英也は怪訝そうに、霧子を見やっただった。一ノ瀬英也は、三十五歳であった。霧子とは、九つ違いである。結婚して五年になる。

「どうして……?」

英也は、眉をひそめた。

「どうして……やっぱり同窓会よりも、一家団樂のほうが大切ですもの」

霧子は、目を伏せて言った。口先だけの、言葉ではなかった。霧子は本気で、そう思ったのである。

「一家団樂なんて、毎日のことじゃないか。ドライブだけが、一家団樂になるわけじゃないだろう」

英也は、苦笑した。

「そりゃあ、そうだけど……免許を取りたてのあなたが、往復の運転をするのも大変でしょ」

霧子は、夫の童顔を見据えた。霧子は運転免許を、六年前に取っている。一ノ瀬家にある乗用車を、いつも運転しているのは霧子だったのだ。

英也が運転免許を取ったのは、二カ月前のことである。その英也に箱根への往復の運転を任せるのは、疲労の原

因にもなるし、危険でもあると霧子は言いたかったのだ。
「おれは新米^{しんまい}だけど、哲也がいっしょだからね。運転は、哲也にさせるさ」

英也は、霧子の危惧^{きぐ}を問題にしなかった。確かに、哲也が運転するのであれば、何の心配もいらないのである。哲也は大手の自動車会社の技術部に勤めているエンジニアで、もちろん運転にも熟練していた。

「英樹が、邪魔^{じやま}にならないかしら。わたしがいないと……」

霧子は言った。

「そうねえ。邪魔になるといふより、英樹が寂しがるかもしれないわね」

と、英也の母親の多美江^{たみえ}が、口をはさんだ。霧子にとつては姑だが、およそそれらしくない多美江だった。話がわかりすぎるくらいに六十歳になる姑なのである。

「だったら、霧子の代わりにお母さんが行ってくれますか」

英也が、多美江に言った。

「そんなの、申しわけないわ」

霧子は慌て^{あわ}て、身を乗り出した。男と密会する霧子の穴埋めに、多美江を動員する。それでは嫁と姑という関

係からもいっそう、心に咎めることになるのだった。

「そうしましょるか」

多美江はあっさりと、息子の提案に応じた。

「いいえ、お母さん……」

霧子は、狼狽^{ろうばい}気味に首を振った。

「いいんですよ。わたしだって、たまにはみんなとドライブをしてみたいし……」

多美江は屈託のない笑顔を見せた。

「でも……」

霧子はますます、窮地へ追い込まれるような気分になっていった。

「遊びに行くんだから、霧子さんが負担に思うことはないのよ」

多美江はすでに、ドライブに同行する気になっているのだった。

「二年ぶりの同窓会なんだろう。またせいぜい羽を伸ばして来ることだな」

英也が言った。別に、妻に甘いわけではないのだ。霧子が同窓会へ行くことを、英也は当然と思っているのである。

「帰りが、遅くなるかもしれないし……」

霧子は、こうなったら予定どおり行動すべきだろうと考えていた。急に同窓会へ行きたがらなくなったと、妙に疑われる恐れもあるのだった。

「そりゃあ、そうだろうな」

英也がうなずいた。

「二次会に、ホスト・クラブへ行こうなんて計画もあるらしいし……」

と、ここで霧子は、嘘をついた。

「最近の流行だな」

英也は、ニヤリとした。

「どうせ会費を取られるんだから、この際ホスト・クラブっていうのを徹底的に探訪して来るのね」

多美江が言った。

「こっちも遅くなるだろうから、帰りの時間を気にすることはないさ」

英也が最後に、そう付け加えた。

2

午前九時すぎに、近藤麻記が来た。近藤麻記は今年の四月に、哲也と婚約した。哲也と同じ自動車会社の、技

術部総務課に勤務している。

今年いっぱい会社を退職して、いわゆる花嫁修業に打ち込むことになっている。哲也との挙式は、来年の十月と決まっていた。哲也は二十九歳、近藤麻記は二十四歳で、見たところも似合いのカップルであった。

哲也がハンドルを握り、助手席には英也が乗り込んだ。後部座席に、多美江、英樹、近藤麻記が並んですわった。シルバー・グレーの乗用車は、午前十時に世田谷の祖師ガ谷にある一ノ瀬家を出発した。

霧子は、門の前に行んで、それを見送った。秋の明るい日ざしに車体がキラリと光り、次の瞬間に乗用車は十字路を左に曲がって消えた。この夏に買い替えたばかりの、国産の中型車であった。

霧子は、家の中へはいった。ついさっきまでの和気藹藹とした雰囲気^{ふんいき}が、まるで嘘のようであった。急に静寂が訪れて、それが奇妙なものに感じられた。

その静寂に、霧子はまた不安を覚えた。霧子ひとりが、家族たちを裏切っている。そのことが、ひとり取り残されたような気持ちにも通じて、心細くさえあった。

しかし、家の中に霧子ひとりしか、いないわけではなかった。一ノ瀬家に住んでいる者は、全部で六人である。

霧子と夫の英也、一粒種^{ひとつくだね}の英樹、姑の多美江、義弟の哲也、それに多美江の妹の富志江^{としまえ}という家族構成なのであった。

近藤麻記も、もう家族の一員のようなものだった。毎週の土曜と日曜は、かならず一ノ瀬家に顔を出しているし、何かあれば準家族として招かれる。遅くなれば泊まって行くということも、珍しくはなかったのだ。

いま家に残っているのは、霧子に富志江であった。富志江は、英也の叔母^{おば}ということになる。多美江とは姉妹でも、年が二十も離れていた。

富志江は、四十になったばかりなのである。多美江とは姉妹というよりも、母娘^{ははな}の感じであった。事実、多美江は富志江のことを、わが子のように扱っていた。

姉妹二人だけだし、ほかに身寄りがない。それが多美江と富志江の仲を、より親密なものにしているのだった。それに富志江は、五体満足の状態にはなかったのである。

富志江は、一ノ瀬家のいちばん奥の和室に寝たつきりであった。動けないのである。五年前から、その状態にあるのだった。そうした富志江への不憫^{ひん}さが、多美江の愛情を母性化しているのに違いなかった。

富志江は五年前に、自動車事故に遭^あったのである。轢^ひ

き逃げだった。目撃者がゼロで、犯人はおろか自動車の車種すらいまだにわかっていなかった。

富志江は、薄幸な女だった。もともと心臓が丈夫ではなく、そのために婚期を逸して、三十四まで独身で過ごしたのである。ずっと官庁の出先機関に勤めていて、結婚とは無縁のハイ・ミスだったのだ。

だが、三十五になって富志江は、適当な結婚相手にめぐり会った。富志江は、その男と結婚することに踏み切った。その気になったせい、心臓が悪いということも斟酌^{しんしやく}しなかったのである。

つまり富志江は、生まれてはじめて恋をしたのであった。結婚式の日取りも決まり、富志江は勤めをやめた。彼女にとって生涯^{しやうがい}での最良の日を、目前にしていたわけだった。

その矢先の、自動車事故だったのである。富志江は幸福の絶頂から、取り返しつかない悲劇の谷間へと突き落とされたのだった。生命に異常はなかったが、富志江は半身不随^{はんしんぶずい}となった。

痛めた脊椎^{せきつい}骨には回復の見込みがなく、富志江は死ぬまで寝たつきりの状態に置かれることになったのだ。歩くことはもちろん、ひとりで上体を起こすのも不可能な

作業だったのである。

婚約は、解消となった。結婚を含めた将来が、すべて取り消しとなったのである。生活もしていけなかった。嫌き逃げでは、入院費も出ないのであった。

その富志江の面倒を多美江が見ることになった。一年間の入院生活のあと富志江は一ノ瀬家に引き取られた。彼女は死ぬまで、身動きできない一ノ瀬家の家族のひとりであるわけだった。

一家団欒には、加わらない家族である。奥の一室に、隔離されているようなものであった。それは富志江のことで、霧子たちに負担をかけまいとする多美江の配慮でもあったのだ。

富志江の生活費も、多美江が出している。多美江は富志江の面倒を見る通いの家政婦を雇っていたが、そのための費用も自分で賄^{まかな}っているのである。

今日も午前九時から、通いの家政婦が来ていた。その家政婦に一言断^{ことわ}わってから、外出しなければならぬ。そう思って、霧子は富志江が臥^ふせっている奥の部屋へ行ってみた。

すでに正午を過ぎていた。霧子は化粧をすませて、黒いスーツに着替えていた。鮮やかな朱色のコートと、バ

ッグを手に入れている。二十六歳の主婦には見えなかった。人妻ではなく、神秘的なムードを持つ娘という感じだった。

家政婦の姿は、部屋になかった。洗濯^{せんたく}物を干しに、裏庭に出ているのだろう。部屋の真ん中の夜具の上に、富志江の寝姿があるだけであつた。

「あの、これから出かけますので……」

霧子は部屋の入口に立って、富志江にそう声をかけた。富志江は、返事をしなかった。聞こえないのではない。富志江の視線は、霧子に注^{そそ}がれている。

「みんなも、出かけてしまっているのです、よろしく願います」

霧子は、富志江に笑いかけた。富志江のほうは、ニコリとしなかった。顔色が悪い。皮膚に艶^{つや}がなかった。不健康というのではなく、生^{せい}気がないのであった。

かつては、美人だったのに違いない。それが事故に遭ったときから、急速に老け込んだのであった。陰気である。その暗さが、部屋の雰^{ふん}囲気まで沈^{ちん}澱^{てん}させている。

霧子は、またもや不安な気持ちになっていた。悪い予感が、富志江によって暗示^{あんし}されているように思えたのだ。しかし、霧子は密会の夜に不幸な事件が起こるだ

ろうというところまでは、予測していなかったのである。

3

一ノ瀬霧子は、家を出た。車の通り抜けが少ない住宅街だったが、今日はさらに静かであった。元日の朝を思わせるような落ち着いた雰囲気である。

どの家も家族たちが出払ってしまっているのか、そうでなければ、そろって寝坊を楽しんでいるかなのだろう。いつもより車が少ないことも、また当然なのであった。

昨日は勤労感謝の日であり、明日は日曜日なのである。間にはさまれた今日は、土曜日だった。週休二日制の企業も多くなったし、どうせなら土曜日に休暇をとる者も少くないのだ。

事実上の、三日間連休であった。レジャー癖のついた連中は、それを利用して旅行や遠出をする。霧子の家でも、そんな話があったのである。

しかし、結局はどこへ行っても混雑しているだけだからと、その話は沙汰やみになった。ただ、どこへも行かないというのも寂しいからと、今日の日帰りのドライブが決まったのであった。

そのドライブにも、霧子だけが加わらなかった。それがなんとなく気がかりで、しきりと悪い予感呼び起こすのであった。出がけに口をきこうとしなかった富志江のことも、霧子の弱気を誘うのである。

いっそのこと家にいたらとも思ったのだが、黒木昌彦との約束を帳消しにするのがいかにも残念であった。そんなことで霧子は、気持ちに踏ん切りがつかないままに家を出て来たのである。

家は祖師ガ谷二丁目にあるが、駅は成城学園前せいじょうがくえんまへのほうに近かった。駅まで歩くことも、小田急線の電車に乗るのも、久しぶりであった。車に乗りつけると、電車がどうしても億劫えいけつになる。

電車から遠ざかっている間に、霧子もベテラン・ドライバーになっていた。今日はその車が、霧子を除いた家族を乗せて箱根へ向かっている。

いまごろはもう、箱根についているかもしれない。中央高速を河口湖まで行き、山中湖畔を通過して御殿場ごてんばへ抜け、芦ノ湖あしのうみスカイ・ライン経由で箱根に出るというコースだった。

そんなとき、霧子ひとりだけが小田急線の駅へ向かって歩いている。霧子は、気が重くなるのを覚えた。夫や

子どもとの間に、途方もない距離を感じたのであった。

電車に乗った。電車もすいていた。霧子は席にすわった。正面と左右に並んでいる男女の視線が、無遠慮に霧子へ集められていた。自惚^{うぶほ}れているのではないが、霧子にとっては馴^なれていることだった。

綺麗^{きれい}な人だ、何者だろう、チャーミングな女だ、タレントだろうか、とそれぞれ見る人の思惑^{おもわく}は違っているが、要するに霧子の美貌は目立つのである。

特に個性的ではないが、大きな目も高い鼻も可憐^{かれん}な唇も、すべてが絵に描いたようにいい形をしているのだった。つまり、彫^ほりが深く細面^{ほそおもて}の整った顔、ということになるのである。ハーフがかつてはいるが、決してハーフにはない顔というのも、霧子の美貌の特徴であった。そこが彼女のチャーム・ポイントになっていて、すれ違う人を振り返らせるのかもしれない。

髪の毛は、長めであった。非常に無造作に、ウェーブがかかっている。その髪型が、霧子を若く見せていた。夫の好みなので、英也と結婚して以来まだ一度も、ほかの髪型に変えたことがなかった。

新宿^{しんじゅく}についた。いまからまた小田急線に乗って、成城学園前まで引き返してはどうかと、そんなささやきが胸

のうちに湧^わいた。自分が応^おずるはずはないと承知のうえで、いちおうそのように呟^{つぶや}いてみたのだった。

足は構わず、地下鉄へと向かっている。なぜ今日に限って、黒木昌彦と会うことに逡巡^{しゆんじゆん}を覚えるのか。ただ単に悪い予感がするとか、家族そろってのドライブに背を向けたからとかいうことだけが、その原因ではないのであった。

もうひとつ、理由がある。霧子はそれを、意識すまいと努めているのだった。そのことをはっきり意識するのが、恐ろしかったのだ。意識することによって、黒木昌彦と会う勇気を失うかもしれない。

そうはしたくないのである。黒木昌彦に、どうしても会いたかった。だが、会えば無視できないことに、直面するだろう。そうしたジレンマが、霧子を迷わせているのだった。

今日の密会は、これまでと違うのである。会って喋^{しゃべ}って、食べて別れる。それだけで終わるデートでないことが、最初からわかっているのだった。

その話は、前回の密会の際に、半ば決まっていたのである。今日の同窓会の帰りに会えるということを、黒木昌彦の自宅に電話で連絡したときも、霧子はその点に

ついて、彼から念を押されたのであった。

「承知なんだね」

黒木昌彦は電話口で、まずそう言ったのだった。

「何が……？」

あまりに唐突すぎて、そのときはまだ霧子にはわからなかった。

「この前のとき、言ったはずだ。こんどは、男と女として会うってね」

黒木昌彦は電話で言葉を交わす場合も、冷やかで高圧的な口のきき方をする。霧子とはぼけることもできずに、思わず黙り込んでしまった。

男と女として会うということが、何を意味しているか、もちろん霧子にもわかっていた。しかも、霧子はその黒木昌彦の申し出を、とんでもないことだというふうには感じなかったのである。

「前回の約束を承知のうえで、あなたはこの電話をかけて来た。つまり、その気でぼくと会うつもりだと、解釈していいんだね」

黒木昌彦の口調は、ひどく真面目であった。笑っていいない。冗談を言っているのではないのだ。彼が本気だということが電話を通じて迫って来るようで、霧子は圧

倒されながら胸の奥にキーンと痛みを覚えた。

「それは……」

霧子は、言葉だけで慌てていた。彼女の気持ちは、決して拒んでいないのであった。

「だったら、場所はぼくが決める。品川のプリンス・ホテルだ」

「ホテルで……？」

「待ち合わせるのは、ホテルのロビーだ。しかし、同じホテルに、部屋も取っておく」

「でも、大丈夫なのかしら」

「何が……？」

「ホテルなんかで待ち合わせて、誰かに見られたりしたら……」

「大して心配もしてないくせに、そんなことを言っごまかすな。それより、どうするんだ。そんなデートだったら中止するのもいいし、それともプリンス・ホテルで予定どおり会うのか……」

ぶっきらぼうというより、ひどく投げやりな言い方も、いつもの黒木昌彦と変わらなかった。

「行きます……」

一瞬、息を詰めてから、霧子はそう答えたのであった。



同時に黒木昌彦のほうで、電話を切ったのである。

4

赤坂のホテルでの同窓会は、まるでつまらなかった。何よりもまず出席者が少なかったことで、拍子抜けした気分させられたのであった。やはり事実上の連休だったことが、影響したのである。

七十パーセントが既婚者だというし、誰もが同窓会より家族連れの行楽のほうを優先するのだった。未婚の連中はだいたい、同窓会に顔を出さないものであった。

今日のパーティに集まったのは、婚家が商店とか飲食店とかいう同窓生ばかりであった。サラリーマンを夫に持つ者は、極端に少なかった。結局は商売を休めないという夫、あるいは出張中の夫を持った女房族の集まりとなったのだ。

霧子の親しい連中は、ひとりも来ていなかった。そのせいか、霧子はなんとなく孤立していた。だが、不満は感じなかった。しょせん、同窓会は利用するだけの口実、道具にすぎないのであった。

多分そうした気持ちがあるので、退屈なのに違いなか



った。同窓会だけが目的だったならば、これでも結構楽しめる雰囲気なのかもしれないのである。

霧子は、会場を見渡した。『孔雀の間』という小宴会場である。カクテル・パーティの様式で、あちこちに、同窓生たちがたむろし、話し込む女の輪が幾つも見受けられた。

この中に、パーティが終わったあと、夫以外の男と密会することになっている者が、何人いるだろうか。おそらく、ひとりもないのに違いない。自分だけなのだと、霧子は思った。

「ねえ、ペコが駆け落ちしたって話、知っている？」

不意に霧子の背後で、そんな発言があった。そこに情報通だという評判の、五、六人のグループが顔をそろえていたのだった。

「ペコが、駆け落ちしたの？」

「知らないわ」

「初耳よ」

「ねえ、それ本当なの？」

と、たちまちほかの女たちが、好奇心を剥き出しにした。

「駆け落ちっていえば古風だけど、つまり愛人と二人で